

岐阜各務野高校

「アニータ・ローベルの『じゃがいもかあさん』」

◎ □ △ ○ ▽ ☆ ◎ □ △ ○ ▽ ☆ ◎ □ △ ○ ▽ ☆ ◎ □ △ ○ ▽

岐阜各務野高校は「悲愴感出まくりで賞」です。大がかりな舞台装置に個性的な役者達、そして彼らに降りかかる絶望的な運命の中で、希望を見出していくストーリーがとてもマッチしていたからです。

まず、クオリティの高い大道具に驚かされました。それは、ただ大きいだけでなく、地上の部分、地下の部分、それぞれ上手からも下手からも出入りでき演技エリアがあって、その立体的な舞台を使って縦横に動き回る大人数の役者たちが、現実の群像劇さらには劇中劇という複雑な構造の世界を表現していました。

90 年ほど前のヨーロッパの話で、現代とあまりにかけ離れていて分からないところがあるのではないか？という意見もありましたが、緊迫感のあるセリフ、演技、迫害される者の中にもある対立、どんどん迫るナチスの残虐さに、恐怖し絶望していく人々、それが群像でありながら、それぞれの立ち位置をきちんと演じられていて、人間ドラマとして伝わってきました。

劇中劇と現実の区別が付きにくいのではないかと、という意見もありましたが、〈じゃがいもかあさん〉の演技は特に迫力があり、劇中で西の国と東の国で対立する兄弟にジャガイモを食べさせることで和解させる。〈作者アニーカ〉以外殺されてしまった現実の中で、現実でもひととき迫害される者同士（ユダヤ人とポーランド人）が手を取り合う。それは〈作者アニータ〉であり、〈母さん〉の叶えられなかった夢というか、希望である。そういう点ではよく伝わったとみんな一致しました。

最後、写真を撮ってそれぞれの人物が観客の方を見てはけるのは、劇中劇の退場であると同時に、その人が殺された＝人生の舞台からの退場を意味しているのだらうと、とても印象的でいい演出だなと思いました。そして、カーテンコールのような写真の再現は、絶望的状况の中で絶望しない、希望を持ち続ける人々が確かに存在した、現実では叶わなかったけれど、「二度と壁を作らない」という夢とともに〈アニーカ〉に、見ている我々に託された、そんな感じがしました。

見終わったあとしばらく立ち上がれないような濃い舞台、重いものを感じた舞台でした。

岐阜各務野高校の皆さん、お疲れ様でした。

◎ □ △ ○ ▽ ☆ ◎ □ △ ○ ▽ ☆ ◎ □ △ ○ ▽ ☆ ◎ □ △ ○ ▽